

2. 環境保全業務報告

2.1 京都大学環境ファクトシート エコ～ると京大2019 活動報告

エコ～ると京大メンバー

(安藤悠太、Abiyan Ardan ARFANI、Isaac OMONDI、Li Ting、
黄 蔚軒、高田咲、谷合敬太、山口真広、上田知弥、小野田千寛、
久保文乃、西道奎、奥野真木保、後鳥友里、白井亜美、田中千尋、
西本早希、野々山千晴、山田千聖、横井晴紀、浅利美鈴)

2.1.1 はじめに

「エコ～ると京大」とは、エコ×世界（ワールド）からの造語であり、「Think Globally, Act Locally, Feel in the Campus!」のメッセージを込めると同時に、本学内でのエコを学ぶ学校（École フランス語で学校の意）を多様な形で開校する意味を込めたものである。

全員参加型で環境負荷を低減した持続可能なキャンパスの実現を目指して、今年度も様々な企画を実施した。毎年恒例の初夏の陣をはじめ、学内において多様な企画を実施したほか、学外の方々と連携したプロジェクトを展開した。

2.1.2 初夏の陣

今年も環境月間に合わせて、5月と6月の2か月間、エコ～ると京大初夏の陣を行った。5月はルネで恒例のオープンラボのほか、縁木り神社で木の枡を配ったり木工教室を開いたりした。また、IPCC開催記念で開催された持続可能な発展や低炭素社会に向けた座談会にメンバーが参加したり、オールナイト映画会を開催したり等、さまざまな取り組みを行っ

た。6月には、パタゴニアとの共同企画、Kistory 夏ver.、締めくくりは、京都大学超SDGsシンポジウム「資源・エネルギーと持続可能性」において京都大学プラ・イド宣言（当初は、プラヘラス宣言）を行い、事始めワークショップや超SDGs道場、ネットワークキングディナーを実施した。また、年間企画の「つづくプロジェクト」や「こんちきジーズ」も始動した。

(1) オープンラボ

5月7日から5月31日にかけて京大生協ルネ1階特設広場にてオープンラボを開催した。6月の環境月間の前に、京都大学で環境問題、持続可能性について研究している先生方をお招きし、学生・教職員の方々にその研究内容を知ってもらい、環境配慮行動につながることを目的とした企画である。今年度のオープンラボでは、1. 毎年恒例のオープンラボ、2. 毎年恒例のフリーマーケット、3. 外部の方々との共催イベントを行った。今年は例年より参加者が少なかったものの、参加者は熱心に先生方の話を聞き、大いに意見交換をした。また、先生方のおすすめ書籍をラボに展示し、ラボに参加した後も学びを深めること

ができる機会を設けた。オープンラボの近くには、吉田キャンパス物理系校舎 7 階東にある常設フリーマーケットを出張オープンした。今年は、縁木り神社になぞらえて、集金箱を木の廃材で作製し、ルネの前に置いた。木製集金箱には 20,484 円が集まり、被災地や海外教育支援活動に寄付した。外部の方との共催イベントとして、日本環境保護国際交流会 (J.E.E.) との「マイバッグを作ろう」と兵庫県川西市国崎クリーンセンター啓発施設ゆめほたる、吉野木工教室との「木工教室」を開催した。どちらも様々な方が参加し、自分の手でモノを作り、大切にする精神を感じてもらえたようである。

オープンラボ担当の先生 (順不同・敬称略)

浅利美鈴 (地球環境学堂)

山敷庸亮 (総合生存学館)

野中鉄也 (工学研究科)

矢野順也 (環境安全保健機構附属環境科学センター)

森里海教育連環学教育研究ユニット—社会班—

徳地直子 (フィールド科学教育研究センター)

石原正恵 (フィールド科学教育研究センター)

清水夏樹 (森里海連環学教育研究ユニット)

法理樹里 (森里海連環学教育研究ユニット)

森林・人間関係学分野オープンゼミ

内藤大輔 (農学研究科 森林・人間関係学分野)

小川裕也 (農学研究科 森林・人間関係学分野)

(2) マイバッグづくり —オープンラボにて—

オープンラボの企画の一つとして、5月8日(水)・9日(木)・24日(金)に、日本環境保護国際交流会 (J.E.E.) の方のご協力をいただき、マイバッグ作りを行った。オリジナルのマイバッグを作り、使うことでレジ袋の削減と使い捨てに対する意識喚起を目的とした。白無地の手提げ袋にクレヨンで絵を描き、最後にアイロンをかけるとクレヨンが袋に定着し洗濯しても落ちなくなる。マイバッグをつくるということは新しく「もの」を生み出すことであり、やがては

ごみになってしまうものをつくっているという指摘もあるが、クレヨンを手にとって絵を描くということが純粹に楽しく、そんな「楽しさ」が環境にいいことをするときの何か大切なことなのだ実感させられたように思う。

(3) 縁木り神社と木工教室

オープンラボの隣のスペースで、5月の1か月間、縁木り神社と木工教室を開催した。縁木り神社とは、使い捨てプラスチックの使用削減を目指す取り組みで、新入生向けイベントとして4月から行っていた。参加者には自分が持っている身近なプラスチック、例えば、コンビニでもらうおしぼりの袋やペットボトルラベルなどを特製の木の神社の結び縄におみくじのように結び付けてもらい、プラスチックとの縁切りを宣言してもらった。今回はプラスチック製品の代替として木製品を推進しようということで、参加者には京大オリジナル木枘をプレゼントした。期間中に約 170 人の方が枘を受け取った。木枘にはエコ〜ど京大キャラクターくすちゃんが描かれており、一合枘なのでお米を量ったり、お酒を飲んだりするのに使える。

また、環境にやさしい木製品に親しもうと、木工教室も開かれた。オープンラボの一環として、計 7 日間行われ、延べ約 40 人が参加した。ゆめほたる、吉野木工教室のご協力をいただき、ごみ袋ラック、竹のプランター、ウッドロックカレンダー、木棚の 4 種類の作品を作った。参加者は無料で本格的木工を体験し、楽しそうに作業していた。脱プラの代替素材の一つである「木」は、適切に管理すれば持続可能であり、林業を活性化することで環境に貢献もできるということで、今回はこの「木」に注目したイベントを二つ行った。参加者にとって、縁木り神社と木工教室での体験が自分とプラスチックのかかわり方を見つめなおす、あるいは、改めて木に親しみを持つきっかけとなれば幸いである。

(4) BRANCH 松井山手×エコ〜るど京大 つづくプロジェクト第1弾「留学生、京大生と 英語で話そう」

「BRANCH 松井山手×エコ〜るど京大 つづくプロジェクト」とは、京田辺市松井山手にある複合商業施設 BRANCH 松井山手（大和リース）を舞台に、SDGs に関するイベントを開催し、BRANCH 松井山手を利用する方々やテナントの方に持続可能性についてともに考え、楽しく行動してもらおうという企画である。その第1弾として、5月5日に「留学生、京大生と英語で話そう！」と題し、BE studio さんにお手伝いしていただき、年少から小学校低学年の子供たちを対象として、留学生とゲームをしながら楽しく英語で会話する英会話教室を開催した。現在、日本では英語教育が重視されているが、本当に英語を学ぶ目的は異なる文化を持った人とコミュニケーションをとることだと考え、英語でコミュニケーションする楽しさをお子たちに感じてもらうことを目的とした。当日は全3回の教室を開催し、延べ30人程度の子供たちが参加した。子供からは「先生じゃない外国の人とお話ができて楽しかった。」という声をいただき、保護者からは、「留学生に、自分からどんどん話しかける娘の姿に驚きました。」という声をいただいた。今回のイベントを機会に子供たちが英語を話す楽しさを感じて勉強に励み、これからも積極的に英語を話していくことを願っている。

(5) 祇園祭創始 1150 年記念プロジェクト こんちきジーズ〜祇園祭から学ぶ持続可能性 SDGs の先へ〜 キックオフミーティング・ 第一回全体ミーティング

「祇園祭創始 1150 年記念プロジェクト こんちきジーズ〜祇園祭から学ぶ持続可能性 SDGs の先へ〜」では、京都の大学生や社会人がグループワークを行い、祇園祭のこれまでの変遷を調べ、実際に祇園祭を訪れて調査を行うことを通して祇園祭の意義や人々の思いなどを学ぶ、その後、祇園祭から学んだことから SDGs や持続可能性について議論する。キッ

クオフミーティングは 2019 年 5 月 12 日に京都大学総合研究 8 号館で行った。プロジェクト参加者のほかに様々なキーパーソン約 80 名が参加し、それぞれの思いがこもったご挨拶、SDGs と祇園祭の基本的な知識や考え方の話題提供、チーム決めのグループワークを行った。最終的に 9 つの魅力的な調査テーマのたたき台が完成した。第一回全体ミーティングは 6 月 1 日に同じ場所で行った。三若神輿会吉川幹事長から祇園祭の神輿神事について基本的な内容のお話を聞き、調査テーマのたたき台をもとに 7 月一か月間行われる祇園祭を中心に具体的にどのような調査を行うかをグループごとに話し合った。また、宿題として取り組んでもらった一日一 SDGs の取り組みの紹介も行った。なお、その後のプロジェクト展開については、後述する。

(6) 京都大学 IPCC ウィークス 2019 山極壽一総長と若手研究者による座談会

本座談会は、2019 年 5 月 11 日に京都国際会館アネックスホールで行われた、京都市主催の「IPCC 第 49 回総会京都市開催記念シンポジウム 脱炭素社会の実現に向けて〜世界の動向と京都の挑戦〜」の一環として開催された。「志の高い京都大学の若手研究者たちが山極壽一総長と『未来を担う若手研究者と地球社会の持続可能な発展に向けた対話』の座談会に挑む！」というテーマで、14 名の若手研究者が、山極総長、河野教授（国際戦略副学長・東南アジア地域研究研究所）、竹谷准教授（経済研究所）、下間局長（京都市地球環境・エネルギー担当）との間で活発な議論を行った。今回、エコ〜るど京大から安藤悠太が代表として参加し「SDGs に覚えてしまう『違和感』を議論する」として議論に加わった。発表を行った 9 名の若手研究者は主にエネルギーや気候変動適応に関わる研究をしており、IPCC ウィークにふさわしい非常に興味深い発表だった。その後は、山極総長からの問いかけに応じる形で、気候変動の話題だけではなく非常に大きな話題まで、複眼的に議論ができた。特に、大学や研究が社会や政策にどう関わってい

くか、これからの社会をどうしていくかなどの議題は大変盛り上がった。終了後には聴衆の方からも多数激励をいただいた。大変内容の濃い、充実した90分であった。このような場に集まって、共通の話題をテーマに議論できること自体が、環境問題・持続可能性を考えることの良さの一つなのではないかと思った。また、今回の座談会で知り合った他の若手研究者の中には、その後も交流が続いている方もおり、非常に良い機会となった。

(7) 「パリ協定に基づく成長戦略としての長期戦略(仮称)(案)」に関するユース世代との意見交換会

5月14日に国際科学イノベーション棟で18:00から環境省による『パリ協定に基づく成長戦略としての長期戦略(仮称)(案)』に関するユース世代との意見交換会が開かれ、若者世代として意見表明を行ったのはClimate Youth Japanの今井絵里菜さん、内藤光里さん、福島雅之さん、エコ〜るど京大の安藤悠太、野々山千晴、そして京都大学環境科学センターの大山晟弥さん、京都大学総合生存学館特任助教の武田秀太郎先生である。まず京都大学大学院経済学研究科の諸富徹教授が基調講演「脱炭素こそが成長戦略」で、エネルギー転換の必要性とその経済的効果、再生可能エネルギーの経済性、そして他国と比較しながら日本の現状を説明した。次に環境省地球環境局総務課低炭素社会推進室から長期戦略案についての説明がされた。そしてユース世代と環境省の意見交換会ではパリ協定達成のためには環境省の掲げる目標は不十分ではないか、将来を担う若者がより深く戦略作成過程に関われる場の提供が必要ではないか、などといった批判的な意見が提出された。意見交換会は、登壇者はもちろん会場の方々からも積極的に意見が出され、様々な境遇や年齢の方の意見が集まる有意義な会になった。

(8) オールナイト映画—〈映像〉を通して考える教育・平和・貧困・ジェンダー—

5月24日の夜から翌日の朝にかけて、オールナイト映画—〈映像〉を通して考える教育・平和・貧困・ジェンダー—を開催した。約15名の参加者とともに、映画を鑑賞し、映画について議論した。作品は、貧困・教育・ジェンダー・平和をテーマに、岡真理先生(人間環境学研究科)に選んでいただいた。「Cleaners ソーシャルメディアの“掃除屋”たち」(“快適な環境”を支える不条理な労働についてのドキュメンタリー)、「小さな哲学者」(フランスの幼稚園における哲学教育を描いたドキュメンタリー)、「ブレット&ローズ」(南北格差と、そのさらに下層にあるジェンダーの問題を描く劇映画)、「女は二度決断する」(社会的なヘイトの当事者を描く劇映画)の4本である。映画鑑賞後、みんなで話をすることによって自分では思っていなかった映画の深さに気づく、また、普段はなかなか真剣に議論できない問題を題材とした映画を観ることで、問題への理解が深まると同時に、一緒に観た人と議論する楽しさを味わう良い機会であった。

(9) WORN WEAR COLLEGE TOUR in 京都大学

6月13・14日に、国際科学イノベーション棟1階ラウンジにて、アパレルメーカーのパタゴニアとの共同企画「WORN WEAR COLLEGE TOUR in 京都大学」を開催した。WORN WEAR COLLEGE TOURは、パタゴニアが全国の大学を訪問し、衣料品の修理を行う企画である。このイベントを通して、環境負荷を削減する「責任ある消費」について学生と共に考えることを目的としている。京都大学では、衣料品の修理に加えて、プロビジョンズ(パタゴニアの手掛ける環境保全型食品)の試食会、エコ〜るど京大チャリティ頒布会の3つの常設イベントと、パタゴニアからゲストスピーカーを招き、トークイベントと食のワークショップの2つの特別イベントを行った。これらのイベントを通して、「責任ある消費」を行うには、新しくものを購入する際に、本当に必要な

ものなのかどうか、その製品はどのようにして作られたのか、一度立ち止まって考えてみるのが大切であるということを知った。また、購入した後は、手入れや修理をしながら、長く大切に使うことで、環境への負荷を軽減できるということがわかった。2日間で、延べ450人近くの学生が参加し、普段、環境問題に関するイベントに参加しないという方にも、環境について考えるきっかけを提供できたのではないと思う。日々の買い物の際に、今回のイベントのことを思い出してもらい、「責任ある消費」について考えることにつなげていただけると幸いである。

(10) Kistory 夏 Ver.

6月22日に浅利研究室と周辺の二部屋を使って、Kistory 夏 Ver.というイベントを開催した。Kistoryとは、使わなくなった着物を持ち主からいただき、今後使用していく若者に渡し、人と人とのつながりを通して魅力ある着物を再度活用していく企画で京都大学の学生団体、京都着物企画との共催で運営している。今回のイベントは夏開催ということで、浴衣を譲り渡した。参加者は47人と盛況で、浴衣を選んでいただいた後、着付け練習や畳む練習をしていただき、その後に贈呈式を行った。浴衣を渡すだけでは味気なく、浴衣を着て色々な遊びができればいいと思い、会場には茶道体験ブースや折り紙で遊ぶブース、百人一首ブースなどを設けた。

2.1.3 サイエンスアゴラ in 京都 京都大学《超》SDGs シンポジウム 「資源・エネルギーと持続可能性」

2019年6月27日に、京都大学時計台百周年記念館にて、サイエンスアゴラ in 京都・京都大学《超》SDGs シンポジウム「資源・エネルギーと持続可能性」を開催した。10:00から20:00まで、開催した本企画には、延べ800人の参加があり、いずれの企画も活気あふれるものになった。まず、10:00の開会にあたっては、山極壽一総長のビデオメッセージが流れ、続けて、北野正雄理事がご挨拶され、和やかに

スタートした。10:10から12:30のパネルセッション「資源・エネルギー問題を起点に、パートナーシップでSDGsに挑む」には、末吉竹二郎氏（気候変動イニシアティブ／WWF ジャパン代表）、門川大作氏（京都市長）、山下良則氏（㈱リコー社長）、山本昌宏氏（環境省 環境再生・資源循環局長）、高瀬幸子氏（近畿経済産業局通商部企画官）、真先正人氏（科学技術振興機構（JST）理事）、諸富徹氏（京都大学地球環境学堂教授）が参加し、酒井伸一氏（京都大学環境科学センター教授）のコーディネートにより、充実した情報交換とエッジの利いたディスカッションが展開された。続いてステージ上では、学生による「京都大学プラ・イド宣言」が行われ、見事な発表に会場は大きな拍手に包まれた。午後は、次の通り、複数の企画が並行して行われ、いずれも熱気あふれる会場となった。

13:00-16:15 地方創生 SDGs 官民連携プラットフォーム JST 地域産学官社会連携分科会

13:00-14:30 企業・団体向け「SDGs 入門」

13:30-14:30 国際WS「レジリエントな低炭素社会の構想」

14:30-16:15 SDGs 事始めワークショップ

16:30-17:45 SDGs に関するもやもや感を少しでも解消！「超 SDGs 道場」

18:00-20:00 超 SDGs ネットワーキングディナー

主催：京都大学

共催：国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）、

関西 SDGs プラットフォーム ほか

協賛・協力：㈱リコー、安田産業㈱、ヒューリック㈱
ほか

(1) 「京都大学プラ・イド宣言」を発表しました

6月27日に京都大学時計台ホールで開催した超SDGs シンポジウムにおいて、プラスチック問題に関する発信を行った。オープニングでは、山極壽一総長のビデオメッセージを上映し、プラスチック問題に大学全体として取り組んでいくことを示していただいた。午前のセッション終了後、エコ〜るど京大

メンバーによる「京都大学プラ・イド宣言」を発表した。目につきやすく減らしやすいストローやレジ袋など、ごく一部の製品のみがやり玉に挙げられている現状に一石を投ずべく、身の回りにあふれている様々なプラスチック製品を認識し、付き合い方を考えることをコンセプトとした。そのツールとして、「京都大学プラ・イド チャート」を作成した。プラスチック製品の必要性、回避可能性を2軸で表すことによって、各製品の立ち位置と今後の取り組み方が分かる図です。その後、翌日から始まるG20に合わせて、20か国の学生が浴衣を着てプラスチック製品で作成した大縄跳びを跳び、プラスチック問題を乗り越えていく決意を表した。今回の企画は、プラスチック問題に取り組むスタートラインであり、エコ〜ど京大では、プラスチックとの持続可能な付き合い方を目指す取り組みを加速させていこうと考えている。

(2) JST主催地域産学官連携分科会ワークショップ

「わたしのまちのスマートモビリティ 2030」

6月27日に「京都大学超SDGsシンポジウム」の中で、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)主催の「わたしのまちのスマートモビリティ 2030」が行われた。これは未来のまちを支える交通や移動をSDGsの視点から考え直すことを趣旨として、いくつかの団体で行われている活動紹介や、有識者の方によるパネルディスカッションを中心としたワークショップである。今回は、行政から3団体、学術機関から3名、法人から5団体、学生から2団体の計13の団体から発表がありました。パネルディスカッションでは、シュマッカーヤンディックさん(京都大学)、手嶋茂晴さん(名古屋大学)、東徹さん(システム科学研究所)、須田英太郎さん(scheme verge)の5名の方が登壇した。今回は科学技術を中心としたワークショップであったこともあり、初めて見聞きするような科学技術から今話題の自動運転技術まで様々な話を聞くことができた。また、パネルディスカッションでは科学技術を実際に社会に実装してい

くことに関する討論がなされ、科学技術そのものからその実装、さらには行政の方がまちづくりに適応していくまでの話を聞くことができた。エコ〜ど京大からは、学生の発表として鯖江市河和田地区での活動の話を中心に中山間地域の交通問題、河和田地区で行われているシェアカーの取り組み事例を紹介した。また、若い世代からの未来のまちの交通に関する意見として、交通を軸に人と人とのつながりが強くなるようなまちにしたい、という話をした。今回発表された皆様に負けず、交通を含め理想のまちを目指し精進していきたいと思う。

(3) SDGs 事始めワークショップ

6月27日に行われたシンポジウム内の14時30分から16時15分まで、時計台百周年記念館国際交流ホールにてSDGs事始めワークショップを開催した。約70人の参加者が、SDGs事始めとして、「誰ひとり取り残さないSDGsワーク」を行った。ワークではまず、「世界から取り残されそうになっている人」を各班1人提示し、その人が抱える問題をSDGsのGoal17に紐づけながら多角的に考えてもらった。短い時間の中でどの班も、課題の人をほぼ全てのSDGsのゴールと紐づけることができていたのが、とても印象的であった。さらに、「自分が2030年までに実行できること」を含む、課題の人が抱える問題の解決方法を考えてもらった。一見すると、自分とは関係性がないような課題の人に対しても、自分ができることがあることを実感していただけたように思う。現代に存在する社会問題の背景には、様々な要素が複雑に絡み合っている。SDGsに含まれる様々な視点を使えば、1つの問題に関わる様々な要素を一度に考えられることを、今回のワークショップで感じていただけていたら大変嬉しい。

(4) 超SDGs道場

6月27日に行われたシンポジウム「資源・エネルギーと持続可能性」内の企画「超SDGs道場」は、

時計台国際ホール I で行われ、約 100 人の方が参加した。このワークショップの内容は、最近巷で話題であり、企業でも推進されている SDGs に対して、違和感や不信感、すなわち「モヤモヤ」を抱いている人で議論しよう、というものです。宮野先生、酒井敏先生、そしてエコ〜ど京大メンバーの安藤さんの 3 人と参加者全員で、デジタルコンテンツも利用し、様々な意見を出した。この企画を通じて、SDGs をただ賛美・批判するのではなく、より深く考えてもらうきっかけになればいいと思う。

(5) 超 SDGs ネットワーキングディナー

6 月 27 日 18 時より京都大学時計台百周年記念館にて、シンポジウム参加者同士の交流を深めるための「超 SDGs ネットワーキングディナー」を開催し、100 名以上の方が参加した。単なるディナーではなく、食べることを通して「食」という観点から持続可能性を考えられるようなメニューを、SDGs17 目標にちなんで 17 品そろえた。たとえば、旬野菜を使ったラタトゥイユ。時期外れの野菜の栽培には、温度調整のために多くの電力が使われることがある。また、国産品が旬でない場合は輸入で賄うこともあり、その分輸送エネルギーがかかる。旬の野菜は安くて美味しいだけでなく、エネルギーを削減できるのである。他には、ブルーシーフードを使った鯖のカレーや野菜の皮を使ったジャム、国産大豆の豆腐などを提供し、小学生のお子様から大人の方までどれも好評をいただき、美味しそうに、かつ楽しく食べている姿が印象的であった。「食べる」という行為は誰もが日々当たり前に行うものであるがゆえに、それに付随する問題はあまり意識されていないように思う。しかし、今回のシンポジウムのテーマである「資源・エネルギー」一つをとってみても、食は持続可能性に密接に関わっています。今回のディナーが、みなさんの日々の食を考え直すきっかけになれば幸いである。

6 月 27 日 超 SDGs ネットワーキング

ディナー 17 のメニューリスト

1. 国産大豆のお豆腐 by 豆腐工房「いづもや」
『エネルギー削減』『地域の産業活性化』『ごみの削減』三拍子そろった地元のお豆腐。国産大豆にこだわったお豆腐を地元商店会から直送。国産のものを選ぶことで輸送にかかるエネルギー、排出される温室効果ガスを削減できます。地元のものを買うことは、持続可能な地域産業にも貢献する。また、個包装のものではなく持参の鍋や容器で買うことで容器包装ごみの削減にも貢献できる。
2. 鯖と九条ねぎカレー by Pasto Generale
ブルーシーフード(後述)のオリジナルメニュー。エコ〜ど京大イチオシ!九条ネギで地産地消費も。
3. 濃縮野菜出汁のジャム by Pasto Generale
資源を最大限使い切ったジャム。農家での生産段階や家庭での調理の際に出る、くず野菜や野菜の皮から取った野菜だしを使用。出汁を取ることで、ごみとして処理するまでの間にもう一段階食料として利用する段階が増え、資源を最大限使い切ることができる。
4. カツサンド by とんかつ清水
一個で満足!京都の食通に知られた極厚とんかつ。「ん?トンカツ?持続可能性と関係なさそう...」と思われた方がいらっしやると思う。確かに肉は豚肉、油も使っており、環境配慮の代表選手とは言えない。しかし、何事も「持続」のためには「無理をしすぎない」ことも大切。今回のその他のメニューも旬の物を選ぶ、資源量の豊富な魚を選ぶなど、「金銭的にも心理的にも無理なく持続可能性に貢献できる」ように!たまに好物も!
5. 焼き芋 by ポテトかいつか
皮まで丸ごと!安心安全で食品ロスのない焼き芋。卸売問屋「ポテトかいつか」が契約農家と共に素材の研究・情報交換・意見交換を重ねて作り上げた焼き芋。残留農薬検査の結果も一般公開しており、安心安全。皮ごと食べられるので、食品ロスの削減にも直結!

6. ラタトゥイユ 旬野菜のトマト煮 by マ・カンティーン
安くて美味しいだけじゃない！旬の野菜で『省エネ』ラタトゥイユ。時期はずれの作物の栽培はビニルハウスやガラス室などで温度の調整が行われていることも。また、国産品が旬でない時期には輸入品で不足を賄うこともあります。旬の物は安くて美味しいだけでなく、食べることで生産・輸送のエネルギーを削減できるのです。

7. チキン(塩こうじマリネ)のハーブロースト by マ・カンティーン

牛肉・豚肉よりも鶏肉を。もちろん、美味しく！鶏肉は他の肉に比べて少ない飼料で生産でき、調理時間も短いため、同じ肉を食べるなら、鶏肉を選ぶことでエネルギーを効率よく摂取でき、使用するエネルギーも削減することができます。また、牛の排出するメタンガスは CO₂ の何倍もの温室効果をもつと言われている。

8. ピクルス by マ・カンティーン

旬の食材を長く楽しめる「保存食」を活用しよう。ピクルスは酢漬けにすることで、保存性を高めている。旬以外の時期に自然に反して生産するのではなく、旬の時期に収穫したものを工夫して保存する。そうすることで、エネルギーをあまり使わず、年中食材を楽しむことができる。また、食材が腐るまえに 保存加工すれば食品ロスの発生も防ぐことができる。

9. ソースアンシュワイヤード (アンチョビ バジルのディップ) by マ・カンティーン

旬の食材を長く楽しめる「保存食」を活用しよう。アンチョビはイワシを塩漬けして熟成発酵させることで、保存性を高めている。ピクルスと同様、エネルギー・食品ロスの削減につながる。

10. 豆腐食パン by Cerchio (チェルキオ)

人にやさしいお豆腐食パン。卵の代わりに豆腐をつなぎに使った食パンです。卵アレルギーを持つ方も安心して召し上がっていただける。また、ミネラルを多く含む粗糖や、天然の塩など体に優しい素材にもこだわっている。ほかにも大豆は血圧や

コレステロール値を下げる効果も認められている。

11. 地場野菜 by 樋口農園

伝統を受け継ぐ地元農家さんのこだわりの旬野菜。樋口農園さんは約 400 年前から京都で農業を営む老舗農家。代々受け継がれてきた京野菜の種を絶やさぬようにとの使命感をもって育てられた、まさに持続可能性を体現するようなこだわりの野菜である。

12. ブルーシーフードカレーの缶詰 by エコ〜るど

京大/セイラーズフォーザシー/カンナチュール エコ〜るど京大も応援するブルーシーフードカレーの缶詰販売開始！この機会に味見と購入を！ブルーシーフード (BSF) とは、資源量つまり個体数が比較的豊富な魚介類のこと。現在、環境変動や乱獲などが原因で、水産資源の枯渇が問題となっており、BSF を選んで食べることは、水産資源の持続可能性につながる。BSF であるカツオ、カキ、ワカメを使ったカレーを保存の利く缶詰にした。

13. 棚田米ごはん

機械に頼らない伝統的なお米。棚田米とは、山の斜面や谷間の傾斜地に階段状に作られた水田で、機械に頼らず手作業で育てられたお米のことである。機械による温室効果ガスやエネルギーが削減される。また、棚田を維持することで、そこに住む多様な生物も保護される。

14. リターナブル瓶ビール

何度も使えるリターナブル瓶のビールは味が違う！リターナブル瓶とは使用後お店に返されたのち、工場等できれいに洗い、中身をつめて再利用される瓶のことである。何度も使えるので、新しく瓶を作るよりも資源の消費やごみを減らすことができる。

15. 十薬 (どくだみ) 茶

自然の薬、手摘みのどくだみ茶。大阪府唯一の村、千早赤阪村で収穫したどくだみ。どくだみは十薬とも呼ばれ、利尿作用や血流促進作用があり、デトックス効果や心臓病・高血圧予防、むくみの改善、冷え性の改善など様々な効果が期待される。自然

の力を感じてみよう。

16. リユース食器

脱！使い捨てのお皿や紙コップ。パーティーやお祭りといえば使い捨てが便利ですが、そこに新たな選択肢として「リユース食器」はいかがですか？繰り返し洗って再利用できるため、ごみの量を削減できる。

17. 食べられるお皿

SDGs メニューを食らわば皿まで。今回は持続可能性に貢献するメニューを様々用意した。せっかくならお皿まで持続可能性に貢献するものを。食べられるので、ごみも出ず、皿洗いに使う水や洗剤の量も削減できる。食べきれなかったら、ミミズの餌にして堆肥化に貢献するので無理なさらず……

2.1.4 マニラ研修

8月11日から4日間、今後の各種取組の知見やネットワークを得るため、フィリピン・マニラを訪問した。今回のマニラ研修は、アジア開発銀行（ADB）の中尾総裁からのお声かけが発端となっており、貴重なきっかけをいただき、また、現地でも貴重な経験や知見をいただき、大変感謝している。また、F.R.P. Philippines Corporation の山分信幸さんとドライバーのマリオさんに、ほぼ全日程において現地でのサポートをしていただいた。

(1) ADB 訪問について

8月12日にフィリピンのマニラにあるアジア開発銀行（ADB）の本部を訪問した。ADB は、1966年に、1) 資金と知識の提供、2) より良い政策の促進、3) 地域協力・友好の推進を通じてアジア地域の途上国の発展を支援することを目的に設立された国際開発金融機関である。現在、68の国と地域が加盟し、中でも日本は最大の出資・拠出国の1つであり、職員数も最大数となっている。また歴代総裁も輩出しており、現総裁である中尾武彦総裁は第9代目である。今回の訪問では、中尾総裁にお会いし、アジアや

世界が抱える問題の現状、その問題に対するアジア開発銀行が行うアプローチを伺い、また私たちの取り組みを紹介した。

環境問題、水、食糧問題の各分野の責任者や担当者から話しを伺うことができた。特に印象的だったのは、食料・農業分野の担当者の方の話である。アジアの国々では急激な人口増加に伴い、より多くの食料供給が必要とされている一方、栄養バランスの偏りによる生活習慣病も問題となっている。また、生産した農作物を消費者に輸送・販売する間で発生する食品ロスも問題となっている。このような問題を解決するために、ADBでは農村開発と食料安全保障のための方策を打ち出している。そして方策を打ち出すだけでなく、異常気象に耐えられる品種の開発やスマートフォンを利用した気象予測など、生産者に直接、技術提供をしている。金融機関として資金を提供するだけでなく、方策を打ち出し、実際に技術面から支援していることに驚くとともに、これが本当の開発支援であると気づかされた。

そして、どの分野の方の話にも共通して言えることは、統合的な問題解決を重視されているという点である。つまり、上下水道普及、気候変動対策、交通インフラ整備などをバラバラに行うのではなく、連携して行おうということである。問題に対し1つつアプローチするよりも統合的にアプローチする方が、効率的かつ迅速であり、早急な開発が求められる発展途上国では理想的な方法であると感じた。

その後、中尾総裁をはじめ、ADBで働く日本人の方々と昼食をとりながら、ADBでの経験や自身が大学生の頃のエピソードなどを伺った。特に英語を使う重要性について皆様から様々な意見をいただき、国際機関で働く今でも英語を学ぶ努力を怠らない姿勢に感銘を受けた。

国際的な問題解決を目指すADBならではの統合的な目標・方策を知ることができたことはとても印象的であった。また様々な国籍・使命を持った人たちが、あらゆる問題解決のために活動するADBで働く方々は、皆さんエネルギーにあふれていて魅力的で

あった。とても貴重な経験・アドバイスを得ることができた。

(2) GAIA 訪問について

8月13日にGAIA(Global Alliance for Incinerator Alternatives)のオフィスを訪れ、Miko Aliñoさんと#breakfreefromplasticの活動を行っているTiaraさんのお話を伺った。GAIAとは、世界90カ国、800以上の市民団体やNPO法人、個人からなる国際的なネットワークである。ゼロウェイストを目標としており、ごみや汚染問題の解決策を見つけることを積極的に取り組んでいる。Mikoさんからは、ゼロウェイスト(Zero Waste)とは何なのか?達成するには何が必要であるかなどを紹介いただいた。ゼロウェイストは環境を改善する以外にも、職業を生み出すことなど、様々な相乗効果があるということが理解できた。

Tiaraさんは、#breakfreefromplasticにおいて、ストローやレジ袋などのシングルユースプラスチック削減に向けた活動を行っている。お話の中で特に印象に残っているのは、フィリピンのSilliman Universityでの取り組みである。この大学では、シングルユースプラスチックの使用を禁止するということを学長が宣言したそうだ。ペットボトルに入ったジュースを販売する代わりに、学内でジュースを作って販売する、包装されているお菓子を販売する代わりに、クッキーを作り、瓶からそのまま販売するなどの取り組みを行っている。私たちの大学でいかにシングルユースプラスチックを削減するかを考える上でとても参考になった。

また私たちの活動の紹介も行い、私たちが作成したPlastic identification chart(Plide)を用いて、プラスチック100製品をお二人に分類してもらった。Plideは、プラスチック製品としているかいないか?という軸と、その製品の使用を避けることができるかできないかという軸の2軸によって身の回りにあるプラスチック製品を4象限に分類することで、

製品の位置や製品ごとの対策を考えることができる。

(詳しくはこちらへ<http://eco.kyoto-u.ac.jp/?p=5664>)
特に興味深かったのは、環境意識だけでなくフィリピンならではの習慣や行動が位置に反映されていたというところだ。例えば、フィリピンのスーパーマーケットでは、レジ袋を配布せず、紙袋を使用していたりする。また、調味料の容器包装は中身のみを量り売りしていることもあり、いらないし避けることができるプラと位置づけられていた。この結果も踏まえて、プラチャートをこれから活用してゆく。

(3) F.R.P.、SMEI、Genetron 訪問について

今回のマニラ研修では、フィリピンでビジネスをされている日本人の方々にお会いし、実際の現場を見学するという貴重な機会をいただいた。フィリピン特有の事情に左右されつつ、ノウハウや地の利を活かして精力的に事業に取り組んでおられるのを肌で感じる事ができた。

まず訪問したのは、F.R.P. Philippines Corporationという、繊維強化プラスチック(fiber-reinforced plastics)製品を製造している企業である。マニラから40kmほど南にある、日本関連企業も多く立地している工業団地Laguna Technoparkにある工場を訪れた。繊維強化プラスチック製品は、軽くて強度が高いため、車体やタンクなどに幅広く使われている複合材料である。ここでは、フィリピンの比較的安価な人件費を活かし、主に日本企業向けの高品質な製品の少量生産に特化して製造を行っている。訪問時はその日の操業が終了した後のタイミングであったが、山分信幸さんと一緒に現場を巡りながら製造過程を見学した。製造方法はシンプルで、木型を用いてベースとなる構造を作り、ガラス繊維を混ぜたプラスチックを塗り重ねていく。大きいものでは数メートルにもなる製品が作られていた。安全対策を促す看板などが至るところに設置されていたのが印象的だった。

2.1.5 四国研修

8月22日から24日までの3日間、京都大学のサステイナブルキャンパス化を目指すエコ〜るど京大のメンバーや浅利研究室の学生らで四国研修を行った。廃棄物に関わる研修先を訪問し、廃棄物に関する様々な関わり方を学ぶことを目的として、香川県、徳島県を訪れ、バイオマス資源化センターみとよ、豊島、上勝町等を見学した。見学だけでなく、浅利研究室のゼミ発表、深夜に及ぶ議論、地元関係者と食事しながらの意見交換など、豊かな学びと交流の研修旅行となった。3日間の行程は以下の通りである。

1日目：香川県三豊市にある廃棄物処理場「バイオマス資源化センターみとよ」を訪問。トンネルコンポスト方式による燃やせるごみの固形燃料原料化のしくみを学ぶ。

2日目：史上最悪の廃棄物投棄事件の現場となった香川県の豊島を訪問。現地の方の案内を聞きながら産業廃棄物が不法投棄されていた現場を視察し、事件の経緯や今後の向き合い方について学ぶ。その後、徳島県上勝町に移動し、山で日本料理を彩る“つまもの”を生産する「葉っぱビジネス」について学ぶ。

3日目：葉っぱビジネスの研修を行う彩山を視察。その後、ゼロ・ウェイストアカデミーで活動し、浅利研究室の学生でもある坂野晶さんから上勝町でのゼロ・ウェイストの取り組みについて説明を受け、上勝町日比ヶ谷ごみステーションを視察。焼却ごみをへらすための工夫や努力を学ぶ。

1日目、2日目の夜は、ホテルにて浅利研究室の学生によるゼミ発表を行い、バスでの移動中にはミーティングも行った。社会人の方々も参加し、様々な意見をいただき、大変有意義な時間となった。研修中はなるべくごみを出さないための工夫に参加者全員で取り組んだ。具体的にはマイバッグ・マイボトル・マイ箸・マイアメニティの持参、食事先での使い捨ておしぼりの使用辞退、研修中に出たごみの分別回収などである。この研修を通してごみ削減の行動が身につき始めた参加者も多くみられ、よい取り組みとなった。

2.1.6 つづくプロジェクト 第3弾「知って遊んで食べてみて！はじめてのブルーシーフード」

11月9日に、つづくプロジェクト第3弾「知って遊んで食べてみて！はじめてのブルーシーフード」を実施した。SDGsの目標14「海の豊かさを守ろう」にちなみ、セイラーズフォーザシー日本支部が制定しているブルーシーフードを題材に、日ごろの買い物で海洋資源の保護に貢献できると知ってもらうことを目的とした。今回は、BRANCH 松井山手で週末に開催されているマルシェ「Toujours le Marche」とのコラボで、中庭で3つのイベントを同時開催した。一つ目は、ブルーシーフードを知るための「紙芝居」、二つ目は、遊びながらブルーシーフードを覚えられる「おさかなパズル」、三つ目は、実際に食べて楽しんでもらう「ブルーシーフードカレー缶の出張販売」。

紙芝居は全5回行い、延べ50人ほどの方々に見ていただいた。子供たちは話を聞くだけでなく元気よくクイズに答え、保護者の方々も熱心に耳を傾けた。紙芝居のあと、バラバラのおさかなを組み合わせて、ブルーシーフードの完成に取り組む子供もいた。パズル完成後は、魚の名前を当てたり、覚えようとしていた。

カレー缶詰販売では、試食を提供し、多くの方々にブルーシーフードを味わってもらった。

紙芝居を見たり、話を聞いてくださった方々からは、「紙芝居の絵がきれいでわかりやすかった」「こんな考え方があるなんて知りませんでした」といったご意見をいただいた。毎日の生活に欠かせない食事だからこそ、そこでの変化は大きな違いを生むと思う。このイベントを機に少しでも多くの方に「海の豊かさを守る」選択肢が増えていることを願う。

2.1.7 エコプロ2019で京大プラ・イド発信

12月5日から7日に東京ビッグサイトで行われた環境系イベント「エコプロ2019」のJST（科学技術振興機構）のブースにエコ〜るど京大として出展した。12月7日にはプレゼンテーションを行い、プラ

スチック削減活動「プラ・イド」を紹介した。40人程度の来場者がプレゼンを聞いてくださり、活動応援していますとのお声もいただいた。

2.1.8 Kistory2019 の開催

12月21日に「Kistory～タンスからの贈り物～」を開催した。Kistoryとは「着物」と「story」、さらには「history」を合わせた造語で、「着られなくなり箆笥で眠っている着物を寄贈していただき、その着物を次の世代へ無償で譲り渡す」ことを指針として、3年間活動してきた。着物初心者でも参加できるよう、また譲渡した着物が再び箆笥に眠らないよう、参加者には別の日に着付けや着物の管理法も伝えている。今回は百万遍知恩寺での贈呈式の後、京都水族館で散策した。20人以上が参加し、京都市の門川大作市長や京都大学環境科学センターの酒井伸一先生の参加も得た。着物を着て出かける場所としては、少しミスマッチかと思われる水族館を選択したが、意外とマッチしていたようだった。寄贈者と受贈者との交流も本企画の重要ポイントで、過去のメッセージも併せて、「Kistory 寄贈者様からのメッセージ&着物に纏わる思い出 2017-2018」「Kistory 参加者の皆様から寄贈者の方々へのお礼の手紙 2018」としてまとめた。

2.1.9 こんちきジーズの展開

2019年5月～2019年12月にかけて京都市と共催で展開し、グループ探求活動には、大学生と社会人合計約60名が参加した。

5月12日のキックオフミーティング（先述）、6月1日の第一回全体ミーティングでは、まずSDGsや祇園祭についての基本的な知識や考え方を知るため、三若神輿会吉川幹事長にお話いただいたり、毎日SDGsの各ゴールに対してできることを取り組む「一日一SDGs」を行ったりした。そして各自の関心から学生、社会人が混成の10のグループに分かれた。グループごとに「技の伝承～こんちきちんから学ぶ祇

園祭千年の秘密～」や「祇園祭を軸とした次世代型鉾町コミュニティのあり方」、「女性と祇園祭の関わり方」などのテーマを設定した。

祇園祭は7月の一ヶ月間行われる。この時期には、グループごとに祇園祭のこれまでの変遷や現状を調査した。文献調査に加えて、山鉾保存会や関係者の方々にアンケートにご協力いただいたりインタビュー調査をしたりすることで、祇園祭の意義や関わる人々の思いを学んだ。第2回全体ミーティング（8月10日）では調査内容の結果の発表を行った。

第3回（9月6日）、第4回（10月19日）、第5回（11月16日）の全体ミーティングでは、調査を通して学んだことからSDGsや持続可能性に関する議論を行った。テーマに関連するSDGsの項目や1150年間で変化してきたこと、変化しなかったことは何か？などを考えることでSDGs17項目や2030年という年限にとどまらず持続可能であるためにはどのようなことが必要なかということまで議論した。

12月14日に開催した成果発表会では、門川市長や祇園祭山鉾連合会理事の岸本吉博様、山口敬一様をはじめとする祇園祭関係者にもご参加頂き、調査内容や考察したことなどを各グループが発表した。心理的な側面に着目し祇園祭が続いてきた理由を考えた班は、「使命感や義務感に加えて、現代はやりがいや楽しさが重視されている。続ける意思をいかに持つかが持続可能な社会の実現には大切」と考察した。また、漫画を用いた発表やダンスや絵の作品の発表もあり、色々な形での発表を行った。成果発表後には参加者全体で、SDGs18番目のゴールを考えるワークショップを行った。プロジェクトを通して考えたことを活かしつつ、グループ活動とは異なるメンバーで目標を考え、それに対して取り組むことができることを宣言した。プロジェクトを通して、時代とともに変遷を伴いながらも続いてきた祇園祭から、これからの社会や暮らしを持続させるためのヒントを得ることができた。

最後に、お世話になった関係者の皆様方に、この場をお借りして、厚く御礼申し上げたい。